

三浦洋子著

『儒教社会に挑んだ北朝鮮の女性たち 抑商主義と男尊女卑思想からの脱却』

明石書店, 2020年

核・ミサイル開発問題をはじめ、とかく軍事・安全保障ないし国際関係論を切り口としてアプローチが図られてきたのが（特に日本における）北朝鮮という題材だが、実際には一当然ながら一北朝鮮という存在は国際政治におけるアクターである以前に、なによりもその裡に生きる人々の営為の集合体であり、さらに付言すればそこにおける営為は一面的な「権力による統制・支配」によってのみ構成されるものではない。よって、北朝鮮の現在を真に読み解こうとするならば北朝鮮の「社会の様態」を十全に視野に入れることが必要になるのだが、アクセスしうる情報・史料が一公然、非公然を問わず一多様化しつつあることもあって、日本においてもジャーナリズムやルポルタージュの手法を通じてのみならず、学術研究の対象としてこれを取り上げようとする試みが近年蓄積されつつある。本書は斯様な流れを構成する成果のひとつに位置付けられるものであり、特に研究対象として視座を定めにくい「女性」を果敢に射程に入れ、論じた意欲作である。以下、本書の内容をその構成に則して概括・紹介し、あわせて示唆点についての所感を記すこととしたい。

まず序言において、著者は朝鮮半島に通底する儒教思想の表現形態としての「重農抑商主義」と「男尊女卑思想」に着目し、それらの結果ともに抑圧対象となっている女性と商業（経済活動）の結びつきのありように社会の動態―実態と変化の様相―を見出しうる、との視座を示す。わけでも、経済活動に従事する過程で女性の意識がどのように変化したのか、が眼目として措定されている。

これを受けて第一章は前段ないし概念整理に充てられ、主として日本との対照を用いながら、朝

鮮半島における儒教的エトス（朱子学の影響の発現形態およびその程度）の抽出が行われる。具体的には、統治・道徳のメソッドとしての朱子学が内包する身分制度（士農工商）と「重農・抑商」政策―商行為を賤業とし、農業を食糧確保の観点からのみとらえて苛斂誅求したことから商業・農業いずれの発展にも帰結しなかった一―の結合に触れ、さらに、特に朝鮮半島（李朝）においては「士」階級（兩班）の量的制約（官職ポストの制約）から朱子学の強調した君臣関係としての「忠」よりも血縁原理としての「孝」が強く根付くことになったと指摘している。天皇・幕府という二元的な統治の特性と、各藩の自立性ゆえに商業・農業の発展の余地が残った日本（徳川時代）との大きな差異はここに存するという。加えて、当初は兩班にのみ適用された価値観が（身分上昇を目論む）他の階級にも共有されたことで、「長幼の序」「孝道」とともに「男女有別」すなわち男尊女卑の倫理観が拡散した点が、同じく徳川時代との違いとして挙げられている。ここから、表題にもある通り「抑商」「男尊女卑」が本書における儒教的要素として同定されるのである。

次いで第二章では、それらの特徴が植民地時代において問題視され、対策が試みられていたさまが描かれる。商業の発達を誘導するための通貨統一（円貨との兌換）と度量衡の整備、小農・自作農の経営安定化のための金融組合の設立、手工業促進策としてのカマス（凧）作成の奨励事業、日本人女性教員による女子教育・啓蒙活動、女性の農作業への参加による収入増加・生活安定（その結果としての共産主義の防遏）をめざした宇垣総督期の「農村振興運動」など、欧米の大衆啓蒙に

範をとって行われた各種施策が、その対象である。

そして第三章より本書の主たる関心対象である北朝鮮へと筆が進み、まずは上述の「儒教的」形質の北朝鮮における受容ぶりが考察される。北朝鮮の外形上の社会主義国としての装いが、その実李朝以来の伝統—特に集権的・硬直的な統治システム、苛烈な社会統制、階層的序列社会—に裏打ちされている点が注目され、北朝鮮と李朝時代を連続性の観点からとらえるスタンスが示されるとともに、斯様な体制を土台として「抑商」「男尊女卑」のエトスがどのように変遷していったかが、ここにおける主眼となる。具体的には、事実上の身分制度（出身成分）と、これを反映して実施される配給制度を通じた住民統治の仕組みを説明した上で、経済の停滞によって配給制度が機能不全に陥ると軌を一にして商業—社会主義的所有を侵食しかねない存在として抑制されていた—が拡大していった経緯が描かれ、特にそれが住民の独自（計画外）の経済活動と闇市場を濫觴として発生したのち経済的苦境の中で市場として半ば公認されるに至り、住民の生計手段として市場が不可欠のものとなったことから「抑商」性向が一にお統制を志向する当局との間に緊張を内包しながらも一大きく転換しつつある点が指摘されている。また、男女平等（女性解放）と機会均等を保障する制度・政策のもと女性の社会進出が進んだ反面、女性の賃金水準が男性の劣位にとどまり、なおかつあくまでそれらの政策も労働力不足への対策としての性格が一義に置かれていたことから「動員」としての色彩が強いものになったとの説明がなされる。集団（女性同盟、人民班）への所属の強制—統制・監視および無償労働と表裏一体の—と育児補助施設の不備が相俟って、女性には革命家（模範的労働者）と家庭婦人（家父長制下の妻・母）の二重の役割が課され、なおかつそれは経済の低迷（公式な雇用の消失）を経ても大きく変化していないというのが、その趣旨である。

続く第四章では前章の背景というべき近年の経済状況の悪化に焦点が当てられ、北朝鮮が韓国との体制間競争と軍事偏重にともなう経済的損失を恒常的に抱えてきたこと、そして不利な自然条件に加えて非効率的な集団経営と画一的な指導が重

なった結果、特に農業の不振が顕著となったことが示される。後者については公的プロパガンダ上においてさえ常に食糧不足が吐露され、解決が叫ばれたにもかかわらず李朝時代の「春窮」の再現とでもいふべき事態が繰り返され出したことが言及されているほか、北朝鮮当局の対策が優良品種の導入、草食家畜（特にウサギ）の飼育奨励、協同農場における生産インセンティブの拡大（農場員の可処分収穫の拡大）といった弥縫策にとどまり、それゆえに食糧増産よりは私的な生産活動—個人耕作地での農作業—の拡大に帰結しているとの分析がなされている。本書の構成においては一種の幕間に相当する箇所になろうか。

その上で、終章となる第五章において、儒教的要素としての「抑商」「男尊女卑」の今日的様相が、両要素を統合する視角の中で再度考察に付される。特に、先にいったん「変化なし」として仮置きされていた女性の社会的な位置付けならびにその意識の変化の詳細が俎上に載せられている。従前の傾向（労働動員の色彩が強い社会進出、経済低迷にともなう公的な育児補助の縮小と配給制度の機能不全）の結果として女性が市場での経済活動の主たる担い手になった点、また（たとえ稼働停止状態であっても）登録された職場への出勤を逃れにくい男性に比べて女性はその制約が総体的に緩いことがこれを後押しした点は今日広く知られているところであるが、そのような「下からの資本主義」化にこれら両要素が与っていた—商行為は公的イデオロギーとしての社会主義（集団主義）だけでなく「儒教精神」にも背馳していたがゆえに「男の仕事」とは見做されず、結果として女性が駆り出されることとなった—との指摘が、ここにおける白眉であろう。また、そのような経済活動の拡大ぶりについて先行研究を引きつつ紹介し、女性の経済力が底上げされたことに触れた上で、本章では北朝鮮女性の意識の「現住所」が連続性と変容の両側面に目を向ける形で分析される。前者については、女性の経済活動への参加は家族の生計維持（家（イエ）の存続）という目的意識に沿ったものにすぎず、また市場での経済活動が制度の裏付けを欠いているがゆえに、固着した家父長制それ自体を動揺させるには至っていないことが指

摘されている。北朝鮮の体制・社会に対し強い異議を有するはずの脱北女性への設問調査結果を通じてさえ、男女の役割分担意識に大きな変化が見出しがたいとの指摘が特に興味深いところである。そして後者に関しては、女性の経済的自立能力が高まった結果として女性の生き方のみならず男性の意識にも変化が生じることとなり、それが独身女性の増加（結婚を「義務」ではなく「選択」として認知する傾向の拡大を意味する）と離婚率の増加、あるいは文芸作品における夫婦関係の記述の転変といった形で可視化しつつあるとされている。もとより斯様な連続性と変容は表裏一体のものであり、本章の記述もあえて結論を急いではいないが、近年、対南・対外談話の発出を通じて注目された金与正・朝鮮労働党副部長（指導者金正恩の実妹）の浮上を北朝鮮指導部—一般社会と同様に北朝鮮を構成する要素のひとつ—に生じつつある変化として注目する「あとがき」の記述も勘案するならば、著者の真意が北朝鮮社会—李朝から儒教的要素を強く引き継いだ—における「蟻の一穴」としての女性の意識・行動の変容の側面を描き出す点に置かれていることは明らかであろう。

以上、雑駁ながら本書の内容を概括したが、これをふまえて筆者なりに講評を試みるならば、その特徴は何よりも論旨の明確さに求めることができる。なによりも儒教という、しばしば明瞭な検証を欠いたまま後進性のイメージのみをもって用いられるキー・ワードから「抑商」と「男尊女卑」という形質を剔抉し、それを社会を分析するための縦軸に据えて叙述を重ねていく著者の姿勢は本書の考察に—平易な語り口から得られる第一印象とは裏腹に—深みをもたらしており、表面的な事象を羅列する、あるいはある政策と結果とを連結することで事たれりとする安易さとは明確に一線を画すものといえる。特に北朝鮮社会の変化と女性の位相という主題が、ややもすれば市場の爛熟と資本主義マインドの定着・拡散、そして担い手としての女性の発言力の拡大といった単線的な図式で取り上げられる現状を想起するとき、斯様なスタンスは重要な示唆を提供するものであろう。また、これに関連して、タテマエ（公定イデオロギーによる規定）と現実（実態）の対比という二

分法に満足することなく、両者の相互作用として北朝鮮社会のありようを描き出さんとする点も本書のいまひとつの特徴ということになる。むろん、時に大胆な省筆をも躊躇わないその記述スタイルには賛否の余地が残ろうが、これらの特徴は本書の大きな魅力と評価しうる。個人的にも、悪しき伝統としての男尊女卑の位置付けと、家庭を守る妻／母としての女性の役割の強調とが何らの忌憚なく併存する北朝鮮の公的文献の記述ぶりは長く不可解な事象であったが、そのような「相互作用」の一端を反映したのものとして文献をとらえることによって疑問が水解した点を、蛇足ではあるが付記しておきたい。

ただし、斯様な明確さが他方において代償をともなうものであることも指摘せざるをえないところであり、なかでも著者の見立てに従えば「抑商」「男尊女卑」と並んで儒教的エトスの根幹をなすと見做しうるはずの血縁主義（家（イエ））の要素が終始後景に退けられ、その変化については部分的に言及されるにとどまっている点が惜まれる。また北朝鮮社会の性質を描出する補助的手段として挿入される比較の対象が日本（徳川時代）に限定される点にも隔靴搔痒の感なしとは言えず、やはり同一の歴史的経緯を共有しつつ異なる政治体制をとった韓国における状況があわせて検証されるべきであったと思われる。さらに個々の記述が既存の研究成果にほぼ依存している点、あるいは読みやすさを重視してか、典拠の表記が（しばしば考察上重要な箇所において）不十分な点にも疑問が残る。これらが十全にカバーされたとき、本書の意義はいっそう「芯の通った」ものになると考えられるのである。

とまれ、本書は視座を定めにくい—あるいはその反作用として一面的に語られやすい—「北朝鮮社会における女性」を考察する上で目標となり、同時に北朝鮮に関心を持つ読者を政治・経済・社会にまたがる様々な気付きへと導き、さらなる問題意識を喚発せしめる示唆に富んだ成果と総括しうる。特に、ジェンダー研究にとどまらず、北朝鮮社会に関心を持つ者にとって、本書はまさに一里塚となろう。

（飯村友紀 日本国際問題研究所）